

女性がやりがいをもって働き、地域に愛される養豚会社に改革

# 株式会社あずみ野エコファーム

※2018年3月現在

代表者名	川上 志江	資本金	2百万円
設立年	1981年8月6日	売上高	178百万円(2016年12月期)
事業内容	生産(豚、堆肥)、 加工・製造	経営規模	畜舎15,000㎡、母豚250頭
従事者数	8人(うち女性4人。女性内訳:役員1人、一般職2人、常勤パート1人)		
女性活躍支援	[女性に配慮して取組んだ環境整備] 施設設備関係(休憩室・シャワー)		



## 経営概況

株式会社あずみ野エコファームは、北アルプスの雄大な自然が広がる「国営アルプスあづみの公園」から車で数分ほど。豚の肥育繁殖一貫経営を行う法人で、現在の母豚の頭数は250頭。年間約4,900頭を出荷するほか、豚糞を活用した堆肥も生産している。代表の川上志江(ゆきえ)氏は前代表と1985年に結婚したのをきっかけに、嫁ぎ先の養豚業に就農(当時は母豚60頭)。農業委員をしていた義父から「若いうちに勉強なさい」とのアドバイスで普及センターの勉強会に参加し、まったく縁のなかった養豚業や農業の仕組

みを学んだ。以来、繁殖から肥育、経理までをこなし、前代表の妻として経営に参画してきた。1986年に法人化を行い、1998年に現在の名称と株式会社に組織変更。前代表が2014年に退き、志江氏が2代目代表に就任した。同年に東京でサービス業に従事していた息子が後継者として就農。息子は生産部門、息子の妻は東京の大企業で働いた経験を活かし、常勤パートとして経理・管理を担当している。

## 1. 経営者の理念・意識改革

前代表との離婚という、やむを得ない事情で代表に就任した川上氏であったが、養豚という仕事が好きなことと、息子夫婦という頼もしい後継者が得られて覚悟がついたという。実務に関する不安はなかったが、社長として人をまとめる力をつけたいとコミュニケーションスクールに通い、各種勉強会にも積極的に参加した。

川上氏が社長となってまっさきに取り組んだのが、地域とのつながりの強化。養豚業は臭いなどの問題から地域住民の理解が必要である。そこで自分たちがどんな会社であるかを知ってもらうため、市や県の職員、地域住民を招いた説明会を年



に2回行おうという地域協定を結んだ。説明会では、社外者が立ち入り可能な堆肥舎の見学会や、臭いの改善の取り組みについてのレクチャーを行っている。

同時に社内の体制強化のためHACCP認定農場の準備をはじめ、3年の歳月を要して2017年に取得できた。地元イベントに積極的に協力し、地域や役所の人々と密にコミュニケーションをとるといった地道な努力を重ねた結果、応援者が少しずつ増えてきた。最近の説明会では地元住民みずから説明会のレクチャー役をつとめ、「川上さんは頑張っている」と周囲に宣伝してくれる理解者も得ている。

こうして地域とのつながりを大切にすることで、念願だった畜産クラスター事業（畜産農家を核に、地域ぐるみで高収益型の畜産を実現するための体制）に参加するための協議会を、2018年度に発足することが決まった。

代表に就任したばかりの時は戸惑いもあったが、“人はいくつになっても道は開けるし、生活も考え方も周りの評価も変わる”ことを実感し、今は社長業を多いに楽しんでいると話す。

## 2. 女性が働きやすい環境の整備

従業員は正社員4人で、そのうち2人が生産部門の20代の女性社員である。それぞれ分娩舎と種付舎の部門を担当する。2人とも畜産に携わるのが初めてということで、8時間の現場作業に慣れるまで作業時間の配分を工夫した。最初の2週間は始業から15時まで現場作業+事務所で1時間の座学をして帰宅、3週間は16時まで現場作業+1時間の座学と、1カ月かけて段階的に作業時間を増やした。さらに体力的な負担を軽減するため、7時~17時の就業時間中1時間半の昼休みを設け、個別の休憩室で横になってゆっくり休めるようになっている。こうした配慮もあって彼女たちは入社1年目で技術を着実に伸ばして

いる。種豚舎担当の女性社員は種付けの成功率が先輩を抜くこともあり、分娩舎担当は離乳頭数が増えるなど、繁殖成績の向上に貢献している。

さらにもうひとつ志江氏を喜ばせたのは、農場内の整理整頓や掃除が以前よりも行き届くようになったこと。月1回訪れるコンサルタント兼獣医からは「タンクの下までゴミひとつ落ちておらず、豚舎がきれいになった」と高評価をもらっている。

## 3. 女性のキャリア形成

「養豚業は女性の力を発揮できる仕事。それぞれの部門の責任者レベルまでキャリアアップしてほしい」と志江氏。女性社員を含め、従業員のキャリア育成のために「農の雇用事業」を活用し、2年間にわたる研修計画を立てている。

志江氏は日本農業法人協会の女性経営者や役員らによって結成された自主的研究会「やまと凛々アグリネット」の発起人であり、2017年6月からは同会の会長を務める。

国内で農業に従事する人の4割が女性とされているにも関わらず、社長業や役員を行う女性のリーダーがまだまだ少ない。こうした現状を打破していきたいと、次世代を担う女性農業者をバックアップする活動を行っていく。

### 審査委員の声

2代目経営者となった川上さん。オープン化、見える化という時代の流れを近隣住民の方や行政との関係のなか、積極的に取り入れていた。経営の持続性を大切に作る姿が印象的であった。また息子夫婦の異業種経験を十分に活かしつつ柔軟な働き方を適用するなど、柔軟な経営者の姿勢を垣間見た。オープンにする、あいさつする、祭りに出る。地域と共生していく農業の今後を、是非応援したい。